白衣の変遷

「白衣の歴史」

職業によってユニフォームは全く異なりますが、医療従事者に限っては、白衣を着用することが多いようです。

では、なぜ医療関係のユニフォームは、汚れやすい白が基調なのでしょう。仕事内容に応じて作られているのだとしたら、それにはどういった背景やルーツがあるのでしょうか。

白衣を着用する目的としては、汚れがすぐに分かるようにすることはもちろん、病原菌を媒介して感染症を拡大させないようにすることや、自分が保持する細菌を患者に移さないようにする意味合いなども含んでいます。

白衣（看護衣）のルーツを辿ると、ナイチンゲールに行きつきます。そもそも看護師の仕事は、修道女たちの奉仕活動として始まった為、当初は黒や灰色の修道服装でした。「白衣の天使」という言葉の由来にもなったナイチンゲールも、実際は、黒っぽい服と白いエプロン姿でした。特に看護婦の服が決まっていなかった当時、彼女は清潔を第一に看護の改革を始め、その中で『看護婦は必ず白いエプロンを着けること』という決まりを作ったそうです。

一方に日本では、白衣は時代の流れや医学的な面から数々の変移を経て現在の様なデザインに発展してきました。

お世辞にも機能的とは言い難い明治時代の制服は欧米の影響を受け、やがて清潔を重視するものに変わり、昭和初期には現在の白衣にかなり近いものが登場します。

①（明治32年～昭和3年頃）②（昭和4年～昭和20年頃）③（昭和20年～昭和40年頃）

現代においても、また白衣は変化しており、白いワンピース姿だったそれまでから、今ではカラーも豊富で、ハートやキャラクター等の可愛い柄の入ったものまであります。

一方で、こういった柄物のカラフルな白衣が普及していないのは、従来の白衣の持つプラスのイメージ（清潔感）等、親しみやすさだけでは割り切れない部分もあるからでしょう。

型は上半身だけ着用するものや、パンツスタイルが普及しつつあり、機能性の他に、それまで女性の仕事であった看護の世界への男性進出も、大きな要因になっているのではないでしょうか。

「白衣の生地」

白衣の白さは清潔感の象徴です。しかしその白さを保つためには、一九七〇年以前は、毎日の手洗いでの徹底した洗濯とアイロン掛けは欠かせませんでした。ナース個人の負担を減らそうと、洗濯を専門業者に頼むと莫大なコストがかかってしまうことになり、病院にとっても頭を抱える大問題だった様です。

よって試行錯誤が重ねられ、生地は綿から当時の新素材、ポリエステルに変化します。（耐久性は綿の4倍、洗濯しても乾きやすく、しかもシワも付きにくいので糊付けもアイロンもいらない）

また、生地を透けにくくする為に生地の織り方も工夫されました。生地のどこにゆとりを持たせるかを追及する為、ナースの体の動かし方を徹底的に研究し、実際の皮膚や筋肉がどのように伸び縮みしているかが細かに記録されたようです。その膨大な観察記録を元に、従来単純な五つのパーツで作られていた白衣をより細かい九つのパーツに細分化し、今の機能性と耐久性に富んだ白衣が生まれました。

日常で何気なく目にし、腕を通すユニフォーム。しかし今のこの形が出来上がるまでには、筋肉の一つ一つの動きが研究され、生地の織り方まで研究され作られていたのです。

引きずるような長い袴の裾に、足袋と草履、（当時淑女のする事ではないとされた）腕まくりに許されない長袖の白衣だった明治時代。それからでは想像も出来ない様な新しいデザインも考えだされている今、医院のイメージに繋がる白衣選びは、大変難しい様に思えます。

受付　I